

一冊の書物が
王朝を揺るがす、
宮廷殺人ミステリー。

『永遠なる帝国』 人間の欲望が 華やかな宮廷に渦巻く

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaru

千八百年代の朝鮮王朝の宮廷内を舞台に練り広げられる、しかもたった一日のことで、ことなかには、さまざまなのが凝縮されていて、目を離すことができない。

宮廷の建築様式と、そこに登場する人々の衣装にみられる、ひとつの美の頂点。王朝という権力が究めた時代。権力を巡り、その主導権を密かに狙う人々と、彼らの思惑と欲望。それらが、見事なコントラストを保ち、一瞬一瞬さえも飽きさせないのである。そして、ここに見えるものは、どの時代の人にもあてはまる、いわば人の業ともいえる哀しさとはかなさが、浮き踊れる。それだからこそ、より美しさを際立たせているのかもしれない。

時代背景がわからないと、いささか理解しにくいところもあるが、韓国では、この舞台となる李朝二十二代の正祖の話は、一般的にもよく知られているという。

正祖は、自らの指揮下に近衛兵団を組織し、また王立図書館を設置。王のもとにすべて平

等であるとして、周辺にも次々に新しい人材を登用した。そして王に賛同する儒学派の南人派という人々の支持を得た。

この正祖の動きには、実は自分の父であるサドセジャンが祖父によって罰を受け、亡くなってしまうという暗い過去がある。サドセジャンの死には、もう一つの古くからの儒学者の集団老論派の言動が大きく影響していた。老論派は政治の中心ともいえる存在で、老論派こそが公共の意見であり、王も彼らによって形作られるという立場を取っていた。しかし、正祖は老論派を退け、王の権力復権を行おうとしていた。そして、当然のことながら、老論派は、正祖の動きを封じ、自分たちの力を誇示しようとする。そんななかでの、一日の物語なのである。

話は宮廷内の王立図書館から始まる。そこで王の正祖(アン・ソンギ)の命令で先代の王の書物を調べていた検書官が死体で発見される。図書館の李人夢(チョ・ジェヒョン)





は、王に報告を行う。王は、老論派に死因の調査を命じる。そして李人夢には、死体が持っていたが現場から忽然と消えてしまった、正祖の祖父が書いたとされる『金勝之事』を探すように、依頼するのだ。李人夢は刑事を担当するチョン（キム・ミョンゴン）に、捜査の協力を頼んだ。

そこから意外な出来事が次々と顕れてくる。老論派の検死の結果、検書官の死因は、突然死というのだが、チョンは、その死因が殺人であるという確証を見つけ出した。それは実に手の込んだものだった。一体誰が殺害を行ったのか。

一方その頃、先代に寵愛された学者の息子で、正祖の師であったチェ・イスクが、異教のキリスト教を信奉している罪で、老論派によって拷問を受け死にかけていた。それを知ったチョンは、彼を救い出した。そこには、やはりキリスト教を信奉し投獄され、離縁して別れたはずの李人夢の妻サンア（キム・ヘス）もいたのである。

チェは、救い出されて間もなく、『金勝之事』のことについて話しかけて死亡する。そして『金勝之事』は、サンアの手へ渡されたことが分かるのである。

『金勝之事』には、なにが書かれているのか。老論派は、消えた書物の中に、先代王がサドセジャンを死亡させてしまった嘆きと、それが老論派の策謀によって生まれた事件だということが書かれているに違いないと推測する。それが世に出ては、老論派にとっては致命的だ。老論派は、書の行方を必死で探す。しかし、正祖にとっては、書があきらかにならば自分の権力の復権の力になる。

しかし、それは本当にある書なのか、それとも、だれかの仕掛けた罠なのか。李人夢が、一つ一つの事実に向かうとき、意外な展開と信頼する王と老論派、さらに両者をとりまく者たちの欲望があきらかになつてくる。

まさにこれは、サスペンスドラマでもあるのだが、たんなるサスペンスになっていないのは、宮廷のドラマが、そのまま現代の日本の政治の、あるいは大企業の、あるいは現代韓国の、そのどれにもあてはまるほどに、人の心に潜む不条理なまでの、権力のまったたなかにある人そのものの、普遍的な哀しさが、見事に映像化されているからだ。

そしてなにより素晴らしいのは、宮廷の当時の建築様式が、このサスペンスの舞台として、実に生きていくということである。♪

『永遠なる帝国』

ETERNAL EMPIRE

監督=バク・ジョンウォン

出演=アン・ソンギ/キム・ミョンゴン/

チョ・ジェヒョン/チェ・ジョンウォン

7月中旬よりユーロスペースにてロードショー